

特別寄稿 ―地域における医療と介護の連携の実情―

介護サービスに関するアンケート調査から見える医療・介護連携の現状と課題

菱池 正之

南丹圏域地域リハビリテーション支援センター（京都中部総合医療センター）

要旨：

【背景】だれもが住み慣れた場所で療養しつつ生きがいに満ちた生活を継続するには、適切な医療と介護の連携は重要であり、介護支援専門員（以下、CM）の果たす役割は大きい。

【目的】CM が抱える課題を明確にし、リハビリテーション専門職（以下、リハ職）の立場から医療・介護連携の現状と課題を考える。

【方法】南丹市内の CM54 名を対象に介護サービスに関するアンケートを実施した。また、南丹市内の 3 病院のリハ職 73 名を対象に退院時の情報提供内容に関するアンケートを実施した。

【結果】CM を対象としたアンケートの回収率は 54 名中 49 名で 91%であった。調査結果より適切なサービスの選択や見直しに苦慮されていることがわかった。リハ職を対象としたアンケートの回収率は 73 名中 49 名で 67%であった。調査結果より、今後予想される日常生活上の問題や体調面の観察ポイント、インフォーマルなサービスの活用についての助言が不足していることがわかった。

【結論】医療・介護連携を促進するには、医療側が CM の抱える課題を知り、在宅生活を継続するために有用な情報を提供することと地域全体で利用者の生活を支えるという地域リハビリテーションの考えをもつことが必要である。

key words : 医療・介護連携, 介護支援専門員, 情報提供, 地域リハビリテーション

I. はじめに

高齢になって疾病を抱えていても、自宅などの住み慣れた場所で療養しつつ生きがいに満ちた生活を続けるための支援には、医療機関と介護サービス提供機関との連携は必須であり、介護支援専門員（以下、CM）の果たす役割は大きい。今回、CM と医療機関に勤務するリハビリテーション専門職（以下、リハ職）にそれぞれアンケート調査を行い、CM が抱える課題を明確にするとともにリハ職の立場から医療・介護連携の課題について考えた。

II. 方法

南丹市内の居宅介護支援事業所、地域包括支援センターに在籍し、日頃ケアプラン作成業務に携わる CM54 名を対象に介護サービスに関するアンケート調査用紙を郵送し、得られた回答から CM が抱える課題や要望を調査した。

また、南丹市内の 3 病院 73 名のリハ職を対象に退院時に CM 宛に作成するリハビリテーション情報提供書の記載内容に関するアンケート調査用紙（アンケートフォーム）を送信し、得られた回答から CM への情報提供内容について調査した。

III. 結果

1. CM を対象とした調査結果

回収率は 54 名中 49 名で 91%であった。96%がケアプランを作成する際に難しいと感じた経験があると回答した（図 1）。どのようなことが難しく感じるかという質問に対する回答は、適切なサービスの選択（21 名）、サービスの定期的な見直し（16 名）の順に多かった（図 2）。また、98%がケアマネジメントの内容を検討する際にリハ専門職からの助言が欲しい場合があると回答した（図 3）。

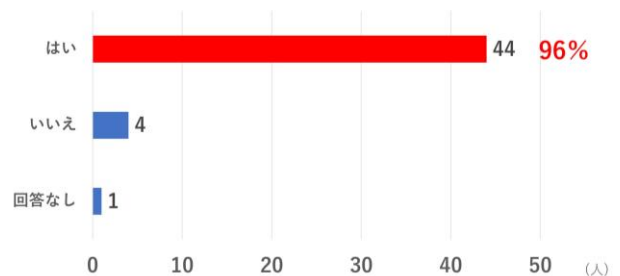


図 1 ケアプランを作成する際に難しいと感じることがあるか



図2 ケアプランを作成する際、どのようなことが難しいと感じるか (複数回答可)

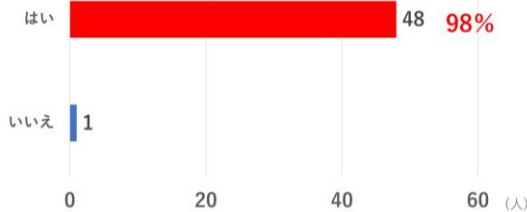


図3 ケアマネジメントの内容を検討する際にリハ専門職からの助言が欲しい場合があるか

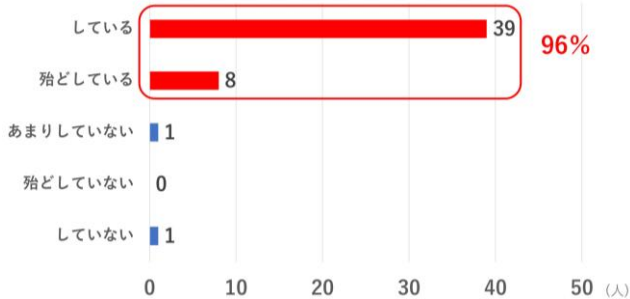


図4 退院時の日常生活動作能力について記載しているか

2. リハ職を対象とした調査結果

回収率は73名中49名で67%であった。退院時の日常生活動作能力については96%が記載していた(図4)。本人および家族へ指導した自主訓練内容や日常生活動作における注意点についても84%と多くのリハ職が記載していた(図5)。今後予想される日常生活での問題とその対応策(サービス内容の変更等)について記載しているリハ職は67%にとどまった(図6)。体調の変化や生活の乱れをいち早く察知できるように観察してほしいポイントについて記載しているリハ職は34%(図7)、必要に応じて介護予防体操やサロンへの参加、ボランティアの活用などインフォーマルなサービスの活用について記載しているリハ職は24%と少ない結果であった(図8)。

IV. 考察

今回の調査により、医療・介護連携の要となるCMが、適切なサービスの選択や定期的な見直しに苦慮されていることが判明したことにより、支援策を検討する必要がある。

高橋は、適切なケアマネジメントには、多職種との共同作業が有効であると述べている¹⁾。また、川越は、様々な障害に対して適切な医療ケアを提供するためには、医療、介護の両方から統合的に関わる必要があるとしており、CMと各専門職との関わりの重要性を述べている²⁾。今回の調査で、ケアプランを作成する際にリハ職からの

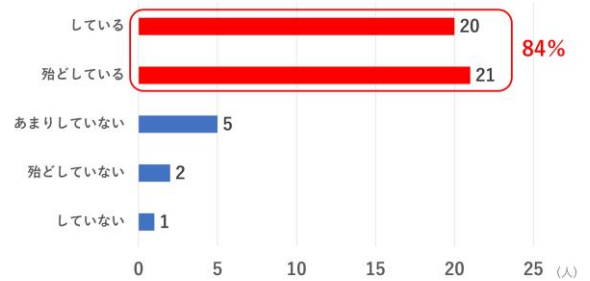


図5 本人および家族へ指導した自主訓練内容や日常生活での注意点について記載しているか

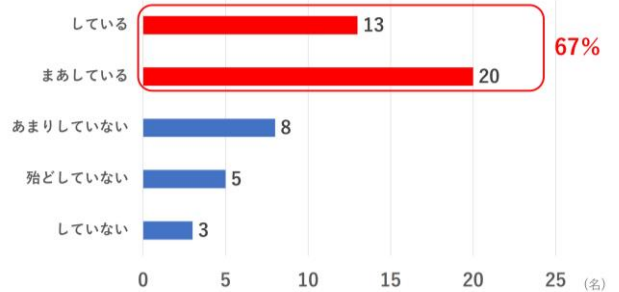


図6 今後予想される日常生活での問題とその対応策(サービス内容の変更等)について記載しているか

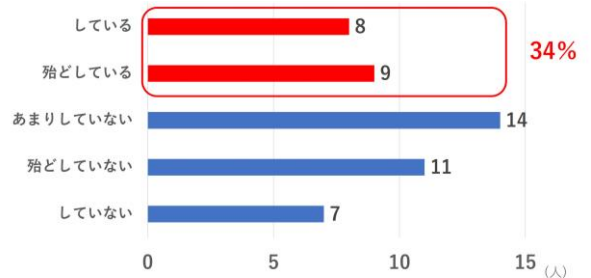


図7 体調の変化や生活状況をいち早く察知できるように観察してほしいポイントについて記載しているか

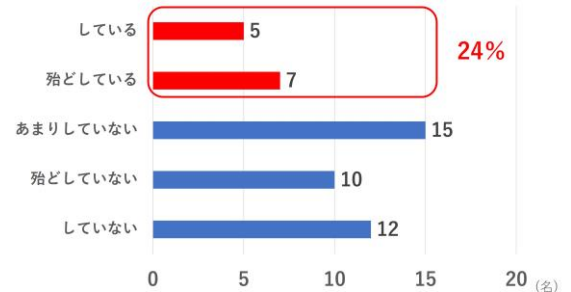


図8 必要に応じて介護予防体操やサロンへの参加、ボランティアの活用等について記載しているか

助言がほしい場合があると殆どのCMが回答していることから、各専門職からCMへの情報提供は欠かせないと言える。

退院時のリハビリテーション情報提供書の記載内容に関する調査では、現状の日常生活動作能力や指導した自主訓練内容については96%のリハ職が記載していたが、今後予想される日常生活での問題とその対応策(サービス内容の変更等)について記載しているリハ職は67%にとどまった。CMがサービス内容を検討する際には、利用者が患っている疾患がどのような経過をたどるのか、それにともない日常生活にどのような影響を与えるのかという予測が必要であるため、将来を見据えた対応策につい

ても医療側から情報提供しておくべきである。

体調の変化や日常生活の乱れをいち早く察知できるような気付きのポイントについて記載しているリハ職が34%と少なかったことも気になる点である。体調の異変にいち早く気付くことができれば、医療機関への受診やサービス内容の見直しなど適切な対応をとりやすいが、気付きが遅れると重篤な状態に陥る可能性があり、情報提供しておくべき内容である。体調の異変に気づいていても医療機関へ繋ぐべきなのか迷われるケースがあるのではないだろうか。在宅生活を支えるスタッフが医療の必要性を判断できるような指標を医療側から示すことも必要である。

また、地域包括ケアの時代においては、医療ケアや介護サービス以外にもNPOやボランティアを活用するなど地域での支え合いが必須であるが、インフォーマルなサービスの活用について記載しているリハ職が24%と非常に少なかったことも気になる点である。

医療・介護連携を促進するには、医療側がCMの抱える課題を知り、在宅生活を継続するために有用な情報を提供することにくわえ、地域全体で利用者の生活を支えるという地域リハビリテーションの考え方をもつことが必要ではないか。

V. 結語

南丹市内のCMおよび医療機関に勤務するリハ職にアンケート調査を行い、リハ職の立場から医療・介護連携の現状と課題について考えた。

医療・介護連携を促進するには各専門職からCMへの情報提供は欠かせない。医療側がCMの抱える課題を知り、在宅生活を継続するために有用な情報を提供することにくわえ、地域全体で利用者の生活を支えるという地域リハビリテーションの考え方をもつことが必要であると考えた。

【参考・引用文献】

- 1) 高橋誠一：多職種チームによるケアマネジメントの可能性。東北福祉大学研究紀要, 24: 1-16, 1999.
- 2) 川越正平：地域における医療・介護の統合にむけたネットワークの構築—多主体連動によるまちづくりに向けた松戸市における実践から—。保健医療科学, 65(2): 114-119, 2016.